

## 大学生におけるいやがらせに関する援助要請行動を抑制する認知的要因

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学心理臨床センター紀要編集委員会 公開日: 2022-04-28 キーワード: 作成者: 篠崎, 美和, 加藤, 伸弥, 石川, 亮太郎, 藤森, 和美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1828">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1828</a>

## ■ 原著

## 大学生におけるいやがらせに関する 援助要請行動を抑制する認知的要因

篠崎美和<sup>1)</sup>、加藤伸弥<sup>2)</sup>、石川亮太郎<sup>3)</sup>、藤森和美<sup>4)</sup>

1) 武蔵野大学大学院人間社会研究科修士課程

2) 武蔵野大学大学院人間社会研究科博士課程

3) 大正大学心理社会学部

4) 武蔵野大学人間科学部

### 抄録

本研究の目的は、援助要請阻害信念尺度の友人版、親版を作成し、その信頼性と妥当性を検討したうえで、いやがらせ被害場面で友人や親に対して行われる援助要請行動を阻害する認知的要因を解明することであった。先行研究を踏まえ、援助要請阻害信念を測定するための候補項目を用意して大学生に実施し、125名の回答を分析した。探索的因子分析の結果、援助要請阻害信念尺度は「悪化と評価懸念」、「無価値感」、「抵抗感」の3種の因子をもつことが明らかとなった。Cronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、十分な内的整合性が示唆された。この3種の援助要請阻害信念が援助要請行動の下位概念（「自律的援助要請」「平気な振り」）にいかなる関連が示唆されるのかを検討するために重回帰分析を実施した。その結果、友人版、親版共に、「悪化と評価懸念」、「抵抗感」が平気な振りに正の、「無価値感」、「抵抗感」が自律的援助要請に有意な負の関連が示された。以上を踏まえ、援助要請を阻害する認知的要因が援助要請行動に関連している可能性が示唆された。

### 背景と目的

意地悪やからかい、菌ごっこ、無視や仲間外れ、カツアゲ、身体的暴力など様々に分類されるいじめ被害は、心理的ストレス症状を高める（岡安・高山，2000；清水，1997）。文部科学省（2020）によると、いじめの認知件数は、平成23年度は77,630件であったが、令和元年度は612,496件と増加傾向にあるのが昨今の状況である。平成25年には「いじめ対策推進法」が施行され、いじめ対策に関する実践や研究はこれまで以上に求められている。

いじめという概念は、からかいなどの軽度のものから、暴力などのいじめ犯罪と呼ばれる重度のものまで幅広く、後に一層深刻な問題に発展する可能性がある（山中・平石，2017）。軽度の行為はいじめかどうかの判断は難しく、いじめと明記する研究や（石川，2010）、いやがらせと位置付ける研究（四辻・瀧野，2003；四辻・瀧野，2011）もある。いやがらせと明記することで、喧嘩や意地悪などの、いじめと判断することが困難ないやがらせ行為と、非行などのいじめ犯罪を明

確に区別することが可能となる（山中・平石，2017）。山中（2014）は、他の生徒から叩かれたり、悪口を言われたり、仲間外れにされたりすることをいやがらせと称し、「個人、または集団が意図的に他者に対して行う行為であり、それを受けた他者が精神的苦痛を感じるもの」と定義した。つまり、行為の重症度はいやがらせ、いじめの順に重くなる。本研究では、山中・平石（2017）の分類に倣い、喧嘩や意地悪等のいじめと判断することが困難な行為をいやがらせと定義し、大学生生活で経験しやすい、いやがらせ行為に焦点を当てる。

久保田（2004）によると、いやがらせ問題の悪化を防ぐ対処法としては、「自分でやり返した」、「やめてと言った」、「先生や親に相談した」などがある。中でも、他者に相談して対処を試みる行動、すなわち、援助要請行動がいやがらせ問題の拡大防止のために有益である（後藤・松浦，2017；高橋・土田ら，2020）。援助要請行動という言葉を初めて用いたのは DePaulo であったという（竹ヶ原・安保，2017）。DePaulo によると、援助要請行動とは、個人が解決しなければならない問題があり、他者が時間、労力、その他の資源を費やしてくれるならば解決、軽減が可能であるときに、個人が他者に向けて直接的に援助を求めることである（竹ヶ原・安保，2017）。

援助要請行動の対象としては、一緒にいる機会が多く援助要請者のことを良く知る信頼できる人物、自尊心を脅威に陥らせない受容的な人間であり（臼井，2021）、友人、次いで家族が最も選ばれやすい（Deane, Wilson, & Ciarrochi, 2001）。大学進学などの重要度が高い相談は母親に、今年度の履修などの重要度が低い相談は友人に行う人が多いという研究もある（臼井，2021）。しかし、大学や学校において、学生が援助を求めない、学生相談に相談しない、という報告もなされており（木村，2017）、援助要請行動をしない、または他の非効果的な方略を行うことで、問題の悪化や不適応に繋がる可能性があることも危惧されている（Newman, 2008；山中，2014）。

では、なぜ問題解決に有用であるはずの援助要請行動は抑制されてしまうのだろうか。これまでの研究では、被援助者にとって問題が重要または緊急でない（島田・高木，1994）、自尊心に対する脅威（Fisher, Nadler & Whitcher-Alagna, 1982）、援助者に対する返報しなければならないという心理的負債感を負わないようにすること（相川，1988）、などが指摘されている。このような研究から、被援助者が援助要請行動を行うか行わないかの意思決定には、認知の存在が影響している可能性が考えられる。木村・濱野（2010）は大学生を対象に、いじめ被害時の援助要請行動の抑制要因について探索的検討を行い、いじめを受けている子どもが、助けを求められない理由を自由記述での回答で求めた。KJ法による分類の結果、1）“プライド”“誰も信用できない”が含まれる「援助要請行動自体に関する要因」、2）“仕返しや悪化への恐怖”“助けを求めた相手に迷惑がかかる”が含まれる「援助要請行動以後の要因」、3）“我慢”“自己解決志向”が含まれる「援助要請行動以外の状況・方略」、4）“いじめが悪化・エスカレートすることへの恐怖”“相談がばれて悪化することへの恐怖”が含まれる「援助要請に伴ういじめや友人関係の悪化への懸念」、5）“親に心配かけたくない”“いじめられているのが恥ずかしい”が含まれる「援助要請行動に対する内的抵抗感」、6）“援助を求めても助けてくれない”“援助を求めて解決しない”が含まれる「援助要請行動への評価」、7）“相談できないいじめ状況”“助けを求められる人がいない”が含まれる「環境要因」の7つの大カテゴリーにまとめられた。

以上のように、木村・濱野（2010）は援助要請行動の抑制要因を質的分析によって明らかにしている。しかし、これはあくまで質的研究であり、統計解析を用いて実証的に検証されておらず、

量的研究を用いたさらなる研究の必要があるように思われる。

## 本研究の目的

本研究では、上述した木村・濱野（2010）の質的研究を参考に、援助要請阻害信念尺度の友人版、親版を作成し、信頼性と妥当性を検討したうえで、いやがらせ被害場面で友人や親に対して行われる援助要請行動を阻害する認知的要因の性質を解明することを目的とする。

## 方法

### 調査対象者および調査時期

大学生 125 名が調査に参加した。そのうち、教示に従っていない回答はなく、125 名の回答を分析対象とした。調査は、2020 年 7 月 13 日から 7 月 20 日に実施された。

### 使用した尺度

**いやがらせ被害時の援助要請阻害信念尺度（友人版および親版）** 木村・濱野（2010）の質的分析の項目を参考に、いやがらせ被害時に援助要請行動を抑制する認知を測定する、いやがらせ被害時の援助要請阻害信念尺度の候補項目を作成した。この尺度は、援助要請を阻害する認知的要因を測定するためのものであり、初期段階では 16 項目を用意した。尺度の作成に際して、いやがらせの抑制要因としてふさわしい内容か、率直な回答が得られるかなどの観点から内容的妥当性を吟味した。回答は「全くそう思わない～そう思う」の 6 件法で求めた。なお、応答スケールの 2 から 5 には言葉を置いていない。また、援助を求める対象者を友人、親の 2 つのパターンを想定して項目を作成した。そのため、いやがらせ被害時の援助要請阻害信念尺度は、友人版と親版の 2 種類を作成した。<sup>1</sup>

**いやがらせ被害時の場面想定尺度** この尺度は、いやがらせ場面を統一するために、回答前に具体的ないやがらせ場面を示したものである。具体的には、刺激文にていやがらせ場面を提示し、

Table 1 いやがらせ被害時の場面想定法尺度の項目

刺激文
この調査では、貴方がいやがらせを受けた場合、”友だち”や”親”に対して、どのような”思考”と”行動”をするかを質問します。まず、貴方が以下のような「いやがらせ」を受けた場面を想像してみてください。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・話しかけても無視される</li> <li>・陰で、自分の悪口を言われている</li> <li>・グループラインで、自分を誹謗中傷するような情報が流れている</li> <li>・会話に入れてもらえない</li> <li>・自分にだけ無理な頼み事をされる</li> <li>・お金や物を貸しても、返してもらえない</li> <li>・自分にだけ無理な頼み事をされる</li> <li>・レポートの代筆を強制される</li> </ul>
以下の文章をよく読んで、回答してください。

1 友人版、親版共に、項目分析で除外した項目も含めた項目プールをAppendixに示した。

それぞれの場面に対する調査参加者の辛さの程度を「全く辛くない～とても辛い」の10件法で求めた。なお、応答スケールの2から9には言葉を置いていない。刺激文の内容は、大学生特有の教育環境を考慮すると共に、言語性攻撃、物理的攻撃など、様々な観点から作成した (Table 1)。

**いやがらせ被害時の援助要請行動尺度 (友人版および親版)** いやがらせ被害者がどのような援助要請行動や援助要請行動の回避方略を用いていやがらせに対処しているかを測定するための尺度である (山中・平石, 2017)。当該尺度は、友人版 (援助要請行動の対象が友人の場合) と教師版 (援助要請行動の対象が教師の場合) がある。友人版、教師版共に下位尺度として、自律的援助要請 (とてもつらくなったときに、友だちに相談する。問題が解決せずに悩みが続くときは、先生に相談する等) 平気な振り (悩んでいることを、友達に気づかれないように振る舞う。先生から大丈夫か聞かれても、心配ないと言う等) 依存的援助要請 (それほど深刻でない悩みでも、わりと友だちに相談する。自分で何とかしようとするよりも、先生に相談する等) の3因子で構成されている。本研究の目的から、自律的援助要請と平気な振りのみを使用し、依存的援助要請は使用しなかった。また、援助要請行動の対象を教師から親へと変更し臨床心理学を専門とする大学院生と教員の2名でそれぞれの概念の定義に照らし合わせて項目の選定を行い、内容的妥当性を確認した。この尺度は、16項目で構成されているものであり、先行研究に倣い「全くそう思わない～とてもそう思う」の6件法での回答を求めた。なお、応答スケールの2から5には言葉を置いていない。構成概念妥当性は、妥当性を支持するものではあるが必ずしも十分とはいえない結果となっており、因子分析の結果から、一定の因子的妥当性が確認されている。また、クロンバックの $\alpha$ 係数は次のとおりであり十分な値を示したことから信頼性も確認されている： $\alpha = .91$  (友人への自律的援助要請)、 $\alpha = .83$  (友人への依存的援助要請)、 $\alpha = .85$  (友人への平気な振り)、 $\alpha = .91$  (教師への自律的援助要請)、 $\alpha = .88$  (教師への依存的援助要請)、 $\alpha = .89$  (教師への平気な振り)。

## 実施手続き

調査は Google フォームを用いた無記名式で実施した。回答に要する所要時間はおよそ10～15分であった。調査は、オンデマンド授業の動画配信の中で、学生の協力者を募ったため、調査に興味を示した人数やその回答率を正確にカウントすることができなかった。調査への回答は授業時間外の任意な時間に行う様に依頼した。また、すべての項目に回答がない場合には、回答が送信できないように設定を行ったため、回答が得られた調査対象者についての欠損値はなかった。

## 倫理的配慮

調査の回答前には、調査目的と以下の倫理的配慮を説明した。第1に、調査への協力は任意であり、回答をしないことによる不利益がないこと、第2に、調査を拒否・中断しても不利益がないこと、第3に、調査は匿名化され得られた個人情報には厳重に管理するという文書を提示しつつ口頭で説明を行った。質問紙への回答をもって、本研究参加への同意を得たとみなし、同意の得られた者を対象とした。

本研究は、2020年作成の大正大学心理社会学部臨床心理学科での卒業論文を遡る形で、武蔵野大学人間科学部研究倫理委員会による倫理審査を受け、承認された (申請番号：2021-09-01)。

## 分析方法

本研究の統計分析には、統計分析ソフト HAD (ver.17.101 ; 清水, 2016) を用いた。まず、いやがらせ被害時の援助要請阻害信念尺度の下位尺度を明確にするために探索的因子分析 (最尤法、プロマックス回転) を行った。次に、いやがらせ被害時の援助要請阻害信念尺度と、援助要請行動、いやがらせ場面想定法尺度との間の関連を検討するために相関分析を行った。また、いやがらせ被害時の辛さと援助要請阻害信念が援助要請行動にどのように関連しているか調べるために、いやがらせ場面想定法尺度といやがらせ被害時の援助要請阻害信念尺度の下位尺度である悪化と評価懸念、無価値感、抵抗感を独立変数、援助要請行動の下位尺度である自律的援助要請と平気な振りを従属変数として強制投入法による階層的重回帰分析を行った。

## 結果

### いやがらせ被害時の援助要請阻害信念尺度における刺激文の辛さの程度の検討

いやがらせ場面想定法尺度が、回答者にいやがらせ場面を想定できる刺激文の苦痛の程度を検証した。その結果、提示された刺激文に対する回答は、評定値 1 は 1 名 (1%)、評定値 2 から評定値 4 は 3 名 (2%)、評定値 5 は 2 名 (2%)、評定値 6 は 6 名 (5%)、評定値 7 は 13 名 (10%)、評定値 8 は 34 名 (27%)、評定値 9 は 23 名 (18%)、評定値 10 は 37 名 (30%) であった。想定したいやがらせ被害の辛さの程度は、高い評定値に回答が集中する結果となった。

### 項目調整

本研究において作成した、いやがらせ被害時の援助要請信念尺度 (友人版、親版) の各 16 項目のうち、天井効果を示した項目は無かった。再度内的妥当性を検討した。その結果、1) 書かれている場面の範囲が指定できていない項目 5、2) 内容の理由が明確に指定できていない項目 8、を各尺度共に削除した。残された各 14 項目について、そもそも概念自体が積極的に同意しにくい性質を有していた可能性があるということや、社会的望ましさの影響で、回答が偏向しやすいという観点から、ある評定値に回答の 50% 以上が偏っていた項目と、評定値 1、2 に回答の 70% 以上が偏っていた項目をさらなる吟味の対象とした。友人版は項目 3、4 の 2 個、親版は項目 31、37、38 の 3 個が、既述の条件に該当したが、概念的な性質を加味し内容的妥当性に問題が考えられる項目 4 以外は分析対象とした。

### いやがらせ被害時の援助要請信念尺度 (友人版) における探索的因子分析

残された 13 項目のいやがらせ被害時の援助要請信念尺度 (友人版) の構造を検討するため、探索的因子分析 (最尤法、プロマックス回転) を行った (Table 2)。最小偏相関平均の値 (MAP) を確認すると、.0663、.0696、.0460、.0540・・・であり、対角 SMC による相関行列の固有値を確認したところ、3 因子構造が妥当であると判断された。この結果と項目作成時の解釈に基づき、3 因子構造を想定した最初の因子分析を行った (最尤法、プロマックス回転)。その結果、すべての項目の因子負荷量が .350 以上となり、3 因子全体における分散の累積寄与率は 72.04%、因子の適

合度は CFI=.926、RMSEA=.120 となった。RMSEA が .100 以上となったが、解釈可能性やその他の統計量のバランスを考慮し、3 因子構造が妥当であると判断した。第 1 因子は、援助要請行動によって問題が悪化したり、厄介者だと思われたくないことを示す項目から構成されていたため「悪化と評価懸念」、第 2 因子は、援助要請行動を行っても真剣に対応してもらえないことや、援助者を信用していないことを示す項目から構成されていたため「無価値感」、第 3 因子は、援助要請行動に対する恥ずかしさや、自身のプライドが傷つくことへの抵抗を示す項目から構成されていたため「抵抗感」と命名した。尺度の下位因子の内的整合性を検討するため、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、「悪化と評価懸念」は、 $\alpha = .87$ 、「無価値感」は、 $\alpha = .89$ 、「抵抗感」は、 $\alpha = .87$ であった。

Table 2 いやがらせ被害時の援助要請信念尺度（友人版）における探索的因子分析

項目 No	項目内容	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
Factor1	悪化と評価懸念 ( $\alpha = .87$ )				
12	友だちに相談することで、問題が複雑になったり、大事になってしまう	<b>.907</b>	-.009	-.040	.777
16	友だちに相談したら、友だちはとても困る可能性がある	<b>.774</b>	-.072	-.141	.450
6	友だちに相談すると、おおごとになって、目立ってしまう	<b>.768</b>	-.020	.060	.621
13	友だちに相談すると、問題が余計に悪化してしまう	<b>.689</b>	.084	.015	.694
15	友だちに、厄介者だと思われたくない	<b>.622</b>	.090	-.052	.482
14	いやがらせを受けている事を相談する事で、友だちに心配をかけたくない	<b>.561</b>	-.018	.019	.362
Factor2	無価値感 ( $\alpha = .89$ )				
11	友だちを信用していない	-.116	<b>.937</b>	-.007	.753
10	友だちは、自分のことを理解してくれない	-.012	<b>.905</b>	-.015	.795
7	友だちに相談しても真剣に対応してもらえない	.045	<b>.797</b>	-.051	.646
9	友だちに相談したら、逆に馬鹿にされる可能性がある	.166	<b>.616</b>	.060	.578
Factor3	抵抗感 ( $\alpha = .87$ )				
2	いやがらせを受けている事を友だちに話すのは恥ずかしいことだ	-.037	-.051	<b>.970</b>	.868
1	いやがらせを受けている事を友だちに話すなんて、自分のプライドが傷つく	-.051	-.061	<b>.870</b>	.676
3	いやがらせを受けている時、友だちに助けを求めるのは情けないことだ	.066	.139	<b>.139</b>	.631

いやがらせ被害時の援助要請信念尺度（親版）における探索的因子分析

残された 13 項目のいやがらせ被害時の援助要請信念尺度（親版）の構造を検討するため、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った（Table 3）。最小偏相関平均の値（MAP）を確認すると .1042、.0750、.0626、.0554・・・であり、対角 SMC による相関行列の固有値を確認したところ、4 因子構造が妥当であると判断された。しかし、友人版との比較容易性と尺度の利便性

を考慮した結果、3因子構造を想定した最初の因子分析を行った（最尤法、プロマックス回転）。その結果、項目43の因子負荷量の値が.350以下であったため、削除したうえで、全12項目に対して再度同様の因子分析を施した。その結果、すべての項目の因子負荷量が.350以上となり、3因子全体における分散の累積寄与率は77.69%、因子の適合度はCFI=.958、RMSEA=.111であった。これらの結果から、3因子構造が妥当であると判断された。因子名は友人版同様の理由により、第1因子を「悪化と評価懸念」、第2因子を「無価値感」、第3因子を「抵抗感」と命名した。尺度の下位因子の内的整合性を検討するため、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、「悪化と評価懸念」は、 $\alpha$ =.82、「無価値感」は、 $\alpha$ =.93、「抵抗感」は、 $\alpha$ =.90であった。

Table 3 いやがらせ被害時の援助要請信念尺度（親版）における探索的因子分析

項目 No	項目内容	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
Factor1	悪化と評価懸念 ( $\alpha$ =.82)				
40	親に相談することで、問題が複雑になったり、大事になってしまう	<b>.920</b>	.131	-.108	.911
34	親に相談すると、おおごとになって、目立ってしまう	<b>.752</b>	.109	.097	.749
41	親に相談すると、問題が余計に悪化してしまう	<b>.712</b>	.315	-.104	.777
42	いやがらせを受けている事を相談する事で、親に心配をかけたくない	<b>.524</b>	-.407	.153	.250
44	親に相談したら、友だちはとても困る可能性がある	<b>.444</b>	-.157	.234	.261
Factor2	無価値感 ( $\alpha$ =.93)				
39	親を信用していない	-.080	<b>.989</b>	.017	.909
38	親は、自分のことを理解してくれない	-.046	<b>.955</b>	.000	.866
35	親に相談しても真剣に対応してもらえない	.048	<b>.838</b>	.058	.698
37	親に相談したら、逆に馬鹿にされる可能性がある	.035	<b>.814</b>	.078	.685
Factor3	抵抗感 ( $\alpha$ =.90)				
30	いやがらせを受けている事を親に話すのは恥ずかしいことだ	.039	.017	<b>.917</b>	.888
29	いやがらせを受けている事を親に話すなんて、自分のプライドが傷つく	.020	.075	<b>.874</b>	.836
31	いやがらせを受けている時、親に助けを求めるのは情けないことだ	.097	.088	<b>.697</b>	.617

### 相関分析の結果

いやがらせ被害時の援助要請阻害信念尺度（およびその下位尺度である悪化と評価懸念、無価値感、抵抗感）と、援助要請行動（自律的援助要請、平気な振り）、いやがらせ場面想定法尺度との間の関連を検討するために相関分析を行った。下位尺度間の関連性を検討するため、Pearsonの積率相関係数を算出した。その結果、友人版、親版共に、いやがらせ被害時の援助要請阻害信念の合計点は自律的援助要請とは負の有意な相関を示した ( $r = -.437, -.632, p < .01$ )。下位尺度である悪化と評価懸念 ( $r = -.296, -.416, p < .01$ )、無価値感 ( $r = -.477, -.636, p < .01$ )、抵抗感 ( $r = -.327, -.480, p < .01$ ) は負の有意な相関を示した。平気な振りといやがらせ被害

時の援助要請阻害信念の合計点は正の有意な相関を示した ( $r=.438, .560, p < .01$ )。下位尺度である悪化と評価懸念 ( $r=.414, .512, p < .01$ )、無価値感 ( $r=.282, .371, p < .01$ )、抵抗感 ( $r=.357, .474, p < .01$ ) は正の有意な相関を示した。また、いやがらせ場面想定法尺度は自律的援助要請と正の有意な相関を示し ( $r=.421, .348, p < .01$ )、平気な振りとは有意な相関は示されなかった ( $r=.018, .010, p=.843, .908$ ) (Table 4・Table 5)。

Table 4 いやがらせ被害時の援助要請阻害信念と援助要請行動の相関 (友人版)

	自律的援助要請	平気な振り
いやがらせ被害時の援助要請阻害信念尺度 (合計点)	-.437**	.438**
悪化と評価懸念	-.296**	.414**
無価値感	-.477**	.282**
抵抗感	-.327**	.357**
いやがらせ場面想定法尺度	.421**	.018

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

数値は Person の積率相関係数

Table 5 いやがらせ被害時の援助要請阻害信念と援助要請行動の相関 (親版)

	自律的援助要請	平気な振り
いやがらせ被害時の援助要請阻害信念尺度 (合計点)	-.632**	.560**
悪化と評価懸念	-.416**	.512**
無価値感	-.636**	.371**
抵抗感	-.480**	.474**
いやがらせ場面想定法尺度	.348**	.010

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

数値は Person の積率相関係数

### 重回帰分析の結果

いやがらせ被害時の援助要請行動 (平気な振り、自律的援助要請) を強める要因を検討するため、平気な振り、自律的援助要請をそれぞれ従属変数とする重回帰分析 (強制投入法) を友人版、親版共に行った。いやがらせ被害時の場面想定法尺度といやがらせ被害時の援助要請阻害信念尺度の下位尺度である悪化と評価懸念、無価値感、抵抗感それぞれを独立変数として投入した。

平気な振りを従属変数とした重回帰分析では、悪化と評価懸念は、友人版、親版共に中程度の有意な正の関連が見出され ( $\beta = .328, p < .01$ ,  $\beta = .334, p < .01$ )、抵抗感は友人版は弱いながらも有意な正の関連が見出され ( $\beta = .209, p < .05$ )、親版は中程度の有意な正の関連が見出された ( $\beta = .268, p < .01$ )。なお、重回帰モデル全体の説明力も友人版、親版共に良好であった ( $R^2 = .212, p < .01$ ,  $R^2 = .333, p < .01$ ) (Table 6)。

Table 6 平気なふりを従属変数とした重回帰分析結果

独立変数	自律的援助要請	平気な振り
悪化と評価懸念	-.134	.328**
無価値感	-.293**	-.010
抵抗感	-.203*	.209*
いやがらせ場面想定法尺度	.455**	-.077
R <sup>2</sup>	.418**	.212**

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

数値は標準化推定値

自律的援助要請を従属変数とした重回帰分析では、無価値感は、友人版、親版共に中程度の有意な負の関連が見出され ( $\beta = -.293$ ,  $p < .01$ ,  $\beta = -.413$ ,  $p < .01$ )、抵抗感は友人版は弱いながらも有意な負の関連が見出され ( $\beta = -.203$ ,  $p < .05$ )、親版は中程度の有意な負の関連が見出された ( $\beta = -.250$ ,  $p < .01$ )。また、いやがらせ場面想定法の辛さは友人版、親版共に中程度の有意な正の関連が見出された ( $\beta = .455$ ,  $p < .01$ ,  $\beta = .260$ ,  $p < .01$ )。なお、重回帰モデル全体の説明力も友人版、親版共に良好であった ( $R^2 = .418$ ,  $p < .01$ ,  $R^2 = .518$ ,  $p < .01$ ) (Table 7)。

Table 7 自律的援助要請を従属変数とした重回帰分析結果

独立変数	自律的援助要請	平気な振り
悪化と評価懸念	-.109	.334**
無価値感	-.413**	.095
抵抗感	-.250**	.268**
いやがらせ場面想定法尺度	.260**	.010
R <sup>2</sup>	.518**	.333**

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

数値は標準化推定値

## 考察

### いやがらせ被害時の援助要請阻害信念尺度の有用性について

いやがらせ被害時の援助要請阻害信念尺度は、友人版、親版ともに内容的妥当性を確認し、また因子分析の結果から悪化と評価懸念、無価値感、抵抗感の3因子から構成されており、一定の

因子的妥当性を有していると考えられる。さらに、Cronbachの $\alpha$ 係数の値から十分な内的整合性が確認された。

援助要請阻害信念は、いやがらせ被害時に援助者に助けてと言うことに対して、迷惑ではないかと感じたり、解決の見込みはないと考えたりして、援助要請を結果的に妨げてしまう認知的要因である。理論上、自律的援助要請とは負、平気な振りとは正に相関することが予測される。援助要請阻害信念尺度と自律的援助要請、平気な振りの相関に着目すると、自律的援助要請とは有意に負の、平気な振りとは有意に正の相関を示しており、この結果は理に適っている。援助要請阻害信念が自律的援助要請と有意に負の相関を示したことは、援助要請阻害信念尺度の弁証的妥当性と併行的妥当性を示唆するものである。しかし、重回帰分析の結果から、自律的援助要請と悪化と評価懸念、平気な振りと無価値感の関連は示されず、友人版における平気な振りと抵抗感は弱い正の関連を示しており、手放して援助要請阻害信念と自律的援助要請、平気な振りの関連を断ることができないことも示唆された。

当該尺度は、援助要請行動を抑制する認知的要因をより明確にすることが可能であり、有用性は幾つかの場面が期待される。例えば、いじめやハラスメントにおける援助要請行動に関する心理教育と研究の貢献である。被援助者は自身が抱える抑制要因は自分だけが抱えるものではなく、一般的な認知だと理解することで援助要請行動を促せることが期待される。そして援助者は、被援助者が援助要請行動を自発的に行わない場合、この認知が抑制要因になっているのではないかという配慮ができる。こうした研究が蓄積することによって、援助者が考慮または排除すべき点が明確になると共に、被援助者も自身が援助要請行動を起こせない理由や現状を知るなど、問題解決に向かう指針の一つになることも期待される。

### 援助要請行動に関連する認知的要因に対するアプローチ

問題を抱えた際に、助けを求めるか否かに関する意思決定における信念や認知は行動よりも時間的に先行していることが幾つかの研究によって示唆されている。予期されるリスクは行動指標の役割を担う可能性があり（前川・金井，2016）、援助要請行動の肯定的結果が想定されることが援助要請行動の促進に関与する（斉藤，2019）。また、援助要請が行われるにあたり、それに先行する認知的概念に被援助志向性がある（雨宮・松田，2015）。被援助志向性とは、「個人が、情緒的、行動的問題および現実生活における中心的な問題で、職業的な援助者およびインフォーマルな援助者に援助を求めるかどうかについての認知的枠組み」と定義される（水野・石隈，1999）。被援助志向性の高さが援助要請行動の促進に関与することが示唆されている（雨宮・松田，2014；雨宮・松田，2015）。

被援助志向性尺度の下位尺度は、困っていることを解決するために、他者からの助言や援助が欲しい等の「援助の欲求と態度」、自分は、人に相談したり援助を求めるとき、いつも心苦しさを

感じる等の「援助関係に対する抵抗感の低さ」の2種の因子構造である（田村・石隈, 2001）。援助要請阻害信念尺度の下位尺度は、本研究により「悪化と評価懸念」、「無価値感」、「抵抗感」であると示された。被援助志向性と援助要請阻害信念は、どちらも認知を表しているが、被援助志向性は他者からの援助に対する期待や欲求が測られ、援助要請阻害信念は他者からの援助要請に対する懸念や心配が測られることが異なる点として挙げられる。つまりは、同じ援助要請に対する認知でも相反する意味を持っていると考えられ、相対する指標として使うことも期待できる。本研究では、援助抵抗感が含まれる援助要請阻害信念が援助要請行動に関連していることが示唆された。つまり、援助要請阻害信念である悪化と評価懸念、無価値感、抵抗感を減らすことで、助けを必要とするときに適切に他者を頼ることに結びつくことが期待される。

援助要請行動においては、いやがらせ被害に対する悩みや辛さを周りに悟らせないように振る舞う平気な振りとの関連として、悪化と評価懸念や抵抗感と有意な正の関連が示された。その逆に、いやがらせ被害に対して自身では解決の見込みがないと判断した際に、援助者に助けを求める自律的援助要請に対して無価値感や抵抗感が有意な負の関連を示唆した。また、いやがらせ場面想定辛さが自律的援助要請に有意に正の関連があることが示された。これは、問題の深刻さの認知が高いほど援助要請行動が促進された結果と類似している（安・永井, 2019）。

この結果から、被援助者が援助要請行動を起こすことに対して持つ、相談しても理解してもらえない、相談することは情けないことだという無価値感や抵抗感の認知を軽減することができれば、自律的援助要請への結びつきが強まることが推測される。また、相談したことによる問題の悪化に対する心配、援助者からの評価、自身のプライドなどの悪化と評価への懸念、抵抗感という2つの認知を軽減することが出来れば、平気な振りへの結びつきが弱まることを推測される。とりわけ、抵抗感は、友人に対しては弱い関連を示しているが、親に対しては中程度の関連が示されているので、友人よりも親の方が、自律的援助要請や平気な振りへの結びつきが弱まりやすいことが推測される。これは、援助要請回避の利益の予期は、援助に対する抵抗感の低さと有意に負の相関を持つと示した研究に類似している（永井・鈴木, 2018）。

また、いやがらせ場面に対して被援助者の辛さが増加すると、自律的援助要請への結びつきが強まる可能性も考えられる。換言すれば、辛いと感じている人ほど援助要請行動が促進されるが、援助要請阻害信念などの抑制要因により、結果的に助けてと言えない状態になっている図式が顕現されたといえるだろう。

### 本研究の限界と今後の課題

本研究で得られたいやがらせ場面想定法尺度において、大学生は高校までの決定された避けられない環境（クラスや担任、授業など）と異なり、人間関係を選択することができるため、自分が嫌だと思う人物を回避することができること（渡邊, 2016）を考慮していない。また、刺激文

のうち、どの項目に辛さを感じたのかについての回答を求めている。このことから、予備調査として事前に現代の大学生が抱える、またはイメージするいやがらせについての特定を行う必要がある。

回答者に性別の回答を求めておらず、男女差が不明で、単一の大学内における限られた学部生の回答が多くを占めている調査であるため、母集団の特性に偏りがある可能性を検証できていない。

いやがらせ被害時の援助要請信念尺度における探索的因子分析の結果得られた3因子において、いくつかの項目が、因子名と直接結びついているか疑われる項目があった。また、尺度項目をそれぞれの概念の定義と先行研究を踏まえて作成し、内容的妥当性を十分に検討したものの、それぞれの概念の1側面を見落としている可能性は否定できない。場合によっては、人数を増やして再度因子分析を行い、因子構造を作り変えた方が良い可能性がある。また、本研究は、100名程度を対象とした横断調査によって得られたデータによって、個人間相関に基づいて分析を行ったものである。今後は、より多くのサンプルを対象に縦断調査を行い、いやがらせ被害時の辛さや、悪化と評価懸念、無価値感、抵抗感が高い人ほど、援助要請行動が阻害されるか否かについてのより詳細な検討が要される。

以上のことから、今後は事前に大学生が抱える、またはイメージするいやがらせのデータを収集した上で、さらなる追試的な検討が望まれる。

## 引用文献

- 雨宮千沙都・松田英子：学生用家族を対象とした援助要請行動尺度作成の試み．ストレス科学研究 29；93-99, 2014
- 雨宮千沙都・松田英子：大学生の家族および友人への援助要請行動に被援助志向性，ソーシャルサポート，その他の心理的変数が及ぼす影響．江戸川大学紀要 25；159-165, 2015
- 相川充：心理的負債に対する被援助利益の重みと援助コストの重みの比較．心理学研究 58；366-372, 1988
- 安婷婷・永井智：抑うつ状況における中国人留学生の援助要請行動のプロセスの関連要因：日本語学校の中国人留学生と日本人大学生の比較より．コミュニティ心理学研究 23；34-51, 2019
- Deane, F. P., Wilson, C. J., & Ciarrochi, J. : Suicidal ideation and helpnegation: Not just hopelessness or prior help. *Journal of Clinical Psychology* 57；901-914, 2001
- Fisher, J. D., Nadler, A., & Whitcher-Alagna, S. : Recipient reactions to aid. *Psychological Bulletin*, 91；27-56, 1982
- 後藤綾文・松浦均：友人に対する援助要請の促進要因に関する研究の動向と課題，三重大学教育学部研究紀要 68；69-75, 2017
- 石川義之：いじめ被害の実態—大阪府公立中学校生徒を対象にした意識・実態調査から—．大阪樟

- 蔭女子大学人間科学研究紀要 9; 155-184, 2010
- 木村真人：悩みを抱えていながら相談に来ない学生の理解と支援—援助要請研究の視座から—．教育心理学年報 56(0); 186-201, 2017
- 木村真人・濱野晋吾：いじめ被害にける援助要請行動を抑制する要因の探索的検討．東京成徳短期大学紀要 43, 2010
- 久保田真功：いじめへの対処行動の有効性に関する分析—いじめ被害者による否定的ラベル「修正」の試み—．教育社会学研究 74(0); 249-268, 2004
- 前川由未子・金井篤子：メンタルヘルス専門家への援助要請に関する研究の動向—援助要請態度，意図，行動の観点から—．名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学 63; 57-72, 2016
- 水野治久・石隈利紀：被援助志向性，被援助行動に関する研究の動向．教育心理学研究 47; 530-539, 1999
- 文部科学省：令和元年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」2020年11月13日 [https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext\\_jidou02-100002753\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf)(2021年9月11日), 2020
- 永井智・鈴木真吾：大学生の援助要請意図に対する利益とコストの予期の影響．教育心理学研究 66; 150-161, 2018
- Newman, R. S. : Adaptive and nonadaptive help seeking with peer harassment: An integrative perspective of coping and self-regulation. *Educational Psychology* 43; 1-15, 2008
- 岡安孝弘・高山巖：中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス．教育心理学研究 48; 410-421, 2000
- 齊藤美香：メンタルヘルスリテラシーが専門家への援助要請行動に与える影響—大学生へのビニエットを用いて—．札幌学院大学心理学紀要 2(1); 13-27, 2019
- 島田泉・高木修：援助要請を抑制する要因の研究 I—状況認知要因と個人特性の効果について—．社会心理学研究 10(1); 35-43, 1994
- 清水賢二：深谷和子著，『「いじめ」世界の子どもたち—教室の深淵—』．教育社会学研究 60; 155-157, 1997
- 清水裕士：フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案．メディア・情報・コミュニケーション研究 1; 59-73, 2016
- 白井志織：大学生における援助要請の促進要因と抑制要因について．聖心女子大学大学院論集 43(1), 84-108, 2021
- 高橋あすみ・土田毅・末木新・伊藤次郎：「死にたい」と検索する者の相談を促進するインターネット広告の要素は何か？．自殺予防と危機介入 40(2); 67-74, 2020

- 竹ヶ原靖子・安保英勇：援助要請における援助者コスト予測の変容可能性：大学生における友人への相談行動に焦点をあてて．対人社会心理学研究 17；25-33, 2017
- 田村修一・石隈利紀：指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究—バーンアウトとの関連に焦点をあてて—．教育心理学研究 49；438-448, 2001
- 山中大貴：いやがらせ被害時の援助要請研究の展望—援助要請と援助要請の回避それぞれの性質の違いに着目して—．名古屋大学大学院教育発達科学研究科 61；137-146, 2014
- 山中大貴・平石賢二：中学生におけるいやがらせ被害時の友人と教師への援助要請方略の検討—援助要請の性質の違いに着目して—．教育心理学研究 65；167-182, 2017
- 四辻伸吾・瀧野揚三：大学生のいじめ観（I）．大阪教育大学紀要 51(2)；300-320, 2003
- 渡邊杏沙：大学生のいじめ加害傾向についての考察—性格特性5因子と家族機能に着目して—．臨床心理学研究 14, 2016

Appendix1 援助要請阻害信念尺度の項目プール（友人版）

項目 No	項目内容	平均値	標準偏差
1	いやがらせを受けている事を友だちに話すなんて、自分のプライドが傷つく	2.552	1.376
2	いやがらせを受けている事を友だちに話すのは恥ずかしいことだ	2.456	1.347
3	いやがらせを受けている時、友だちに助けを求めるのは情けないことだ	2.152	1.332
4	悩みを自分で解決できない人間は弱い人間だ	2.216	1.383
5	友だちに相談したことで周囲に知られて、噂になり広まってしまう	3.296	1.556
6	友だちに相談すると、おおごとになって、目立ってしまう	3.280	1.543
7	友だちに相談しても真剣に対応してもらえない。	2.504	1.451
8	友だちに話しても、解決しない	3.576	1.618
9	友だちに相談したら、逆に馬鹿される可能性がある	2.176	1.362
10	友だちは、自分のことを理解してくれない	2.312	1.304
11	友だちを信用していない	2.416	1.432
12	友だちに相談することで、問題が複雑になったり、大事になってしまう	3.416	1.556
13	友だちに相談すると、問題が余計に悪化してしまう	2.992	1.434
14	いやがらせを受けている事を相談する事で、友だちに心配をかけたくない。	4.008	1.537
15	友だちに、厄介者だと思われたくない	3.864	1.638
16	友だちに相談したら、友だちはとても困る可能性がある	3.976	1.376

## Appendix2 援助要請阻害信念尺度の項目プール（親版）

項目 No	項目内容	平均値	標準偏差
29	いやがらせを受けている事を親に話すなんて、自分のプライドが傷つく	2.832	1.650
30	いやがらせを受けている事を親に話すのは恥ずかしいことだ	2.728	1.658
31	いやがらせを受けている時、親に助けを求めるのは情けないことだ	2.336	1.414
32	悩みを自分で解決できない人間は弱い人間だ	2.248	1.446
33	親に相談したことで周囲に知られて、噂になり広まってしまう	2.336	1.591
34	親に相談すると、おおごとになって、目立ってしまう	3.112	1.819
35	親に相談しても真剣に対応してもらえない。	2.264	1.632
36	親に話しても、解決しない	3.232	1.779
37	親に相談したら、逆に馬鹿にされる可能性がある	2.208	1.667
38	親は、自分のことを理解してくれない。	2.488	1.615
39	親を信用していない	2.240	1.558
40	親に相談することで、問題が複雑になったり、大事になってしまう	3.088	1.746
41	親に相談すると、問題が余計に悪化してしまう	2.728	1.663
42	いやがらせを受けている事を相談する事で、親に心配をかけたくない	3.944	1.652
43	親に、厄介者だと思われたくない	2.864	1.701
44	親に相談したら、親はとても困る可能性がある	3.040	1.593